

図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（第6回）

における主な意見

<御発表>

奈須委員「学習指導要領等の改訂を巡る審議の状況について」

- 令和6年12月25日、文部科学大臣から中央教育審議会へ「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」諮問し、示された課題として「主体的に学びに向かうことができている子供の存在」、「学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ば」、「デジタル学習基盤の効果的な活用」の3点があった。
- 審議の具体的な内容として「多様性に応じられる教育課程をどう支えるか」では、学校の教育課程全体を柔軟なものにし、裁量拡大をして、地域や学校のニーズに合ったものができるような仕掛けにする、いわば「2階建て」による教育課程が議論されている。
- そして「内容的な弾力化」として、一つ一つのコンテンツや指導内容を集約的に整理するような教科の本質を意識し、統合的な意味理解を教員が押さえて指導し、児童生徒もそれと分かるような「中核的な概念」を中心にした教育課程も議論されている。
- 個別最適な学びと協働的な学びの展開では、環境を通して行う教育という考え方が鍵になる。個別最適な学びと協働的な学びにおいては、学習や活動をする道具や材料、情報が全部整っている場があり、その場において児童生徒が活動することとなる。このような学習環境の整備として学校図書館が新たなアプローチをし、教室周辺を整備し、効果的に配置する取組も見られる。

紀之定委員「学校図書館における子供の学びを支える読書環境の現状と今後の充実に向けて」

- 熊取町立熊取北中学校は「スクール・エンパワメントの学校図書館を充実・活用するためのモデル校」として様々な取組を行った。研究テーマは「学校全体で本に親しむ活動や学校図書館を活用した各教科等の授業づくりをめざして」とし、生徒の言語能力の育成・コミュニケーション能力の向上を目標にしながら、司書教諭として学校全体を巻き込めるように校内研修や研究授業を実施した。
- 図書館教育部では「学ぶ楽しさ 知る喜び つながりながら進める読書活動」を目標とし、全教科・各分掌とつながり、仲間との学びをつなげ、チーム学校としてより成果を上げ、確かな力になれる学校図書館を目指して取り組んでいる。
- 毎年4月当初の職員会議で学校図書館活用計画一覧表を提案し、全教育活動で学校図書館利活用の授業づくりを検討してもらうよう働きかけている。また、主体的な学びを目指し「学習計画表」を作成している。これにより、単元の目標、学習の流れ、日程、学習内容

の計画が分かり、生徒自身が見通しを持って進めていけるようになり、多くの教科で活用されている。

- GIGAスクール構想や、1人1台端末時代の教科横断の授業における学校図書館の活用として、1つのテーマに対して理科、体育、社会、英語、国語、数学、家庭科等の各視点で学びを深め、つなげる取組も行った。その際、多様な複数の資料を比較・評価し、紙書籍とインターネットそれぞれの特性を生かして使い分ける指導を行った。
- 学校図書館とICTをともに活用し、思索をまとめ発表するプロセスが大事であり、そのために学校図書館が信頼できるサイトのリンク集や使い方を提供することが必要である。生徒が互いのつながりを深め、仲間意識が感じられるような授業づくりを支えることが大切だと考えられる。
- 生成AIの特徴や問題点を正しく理解した上で、画像編集のアプリ等とともに効果的に活用できるよう、新しい時代に対応する情報活用能力の育成も視野に入れていく必要があることも課題として考えられる。

高橋委員「子どもの学びを支える公共図書館の活動及び今後の展望～『夏休み子ども図書ウィーク』の実践から～」

- 静岡県立中央図書館では、平成23年度より「夏休み子ども図書ウィーク」を開催し、今年は7本の講座を実施した。講座の内容を工夫してきた結果、図書資料と直接関連性を問わないものや、他者との交流の要素があったり、成果物等のある実用的な講座が大半となっており、応募も多数ある状況となった。
- 知識・技能の習得した結果できる「モノ」や、プログラミングや英語の学習方法のような具体的な手段や方法に当たる「ノウハウ」、他者と一緒に何かを楽しむ機会「コミュニケーション」の3つがある講座を企画すると、子供が集まりやすく、楽しく意欲的に取り組む傾向にある。
- このことを踏まえ、中高生対象にも実践的・実用的な講座ができないかと検討しているところである。その際、読んで、考えて、表現するという資質の向上と、取り組むことの楽しさを狙いとし、そこから読書人口の裾野の拡大につなげていけるのではないかと考えている。
- 0歳から5歳の子供は、読み聞かせ等で本に親しむ機会が多く、読書に親しむための環境が大人によって整えられている。一方、10歳を過ぎると電子機器の専用と共用が逆転し、子供専用の電子機器の所有割合が65%を超えるという調査結果があり、電子機器を利用した娯楽や学びを求める結果、読書から離れる子供も相当数いると思われる。
- このような子供を読書活動に呼び戻すためには、読書に多少の不便や負荷があっても、それらを乗り越える価値や実用性があることを示し、まずはトレーニングのつもりで読書に取り組むように導く工夫も必要ではないか。

<意見交換>

I. 社会変化等を踏まえた図書館・学校図書館の運営充実の在り方

3. これからの子供の学びを支える読書環境の充実

1 児童生徒の自主的、自発的な学習活動や読書活動の充実のために求められる役割・必要性

- 学校全体が図書館になるような環境からの整備とは、学校の在り方、学びをどう捉えるか、そのための施設整備をどうするかという点において、図書館や図書室の影響というのは大きいのではないかと。学校図書室や図書館の位置づけをもっと大事にしてもいいのではないかと。
- 学校図書館が読書の楽しさを実感できる場や時間を提供することで、生徒主体の読書につながっていくのではないかと。
- 学校図書館の運営や読書活動の推進において、特に障害のある子供たちについては、意思決定支援のプロセスを踏まえた取組が重要と考えられる。意思実現が叶うことにより、子供たちが学校図書館や読書活動に興味・関心を持ち、主体的な読書活動につながると考えられる。そのために、教員の意識改革をさらに促進させる必要がある。
- 教員が読ませたい本を中心に選書するのではなく、子供が学校図書館に置いてほしい本も選択し、図書の整備をする中で子供が学校図書館に関心を持ってもらえるような取組等も行うと良い。
- 学習指導要領等の学校教育の側から見た学校図書館と、学校図書館ガイドライン等の学校図書館側から見た学校図書館について、それぞれズレが見受けられる。そのため、政策全体の中で学校図書館がどういう場所かを明記し、定義した上で、学校図書館をどう整備すべきかを議論する必要がある。
- 子供の生活の中において、図書館や書店に行くことが選択肢に入っていないものの、勉強場所を求める中高生もいる。しかし図書館は場所を提供しているが、今後これらの需要と供給が一致していく取組が求められる。
- 子供が語彙を増やし、自分以外の考え方に触れ、知らない世界に出合うためには表現力や想像力の広がる良質の言語に出会う機会が必要である。

2 図書館資料・サービス、施設・設備の在り方

- 単に蔵書を整えるだけでなく、教職員から生徒への働きかけや、生徒がすぐに手に取れる環境づくり、さらには、生徒が自分の図書体験を発信できる仕組みを整えることが今後さらに求められると考えられる。
- 探究的な学習の資料収集、ICTを活用した調べ学習等で図書館は重要な役割を担い、この役割を充実させるため、常に開館し、児童生徒が利用できる体制として放課後や下校時刻までも含めた運営体制を整備し、加えて、学校図書館を児童生徒の落ち着ける居場所として日常的に利用できるよう整備することが求められる。

- 子供同士で楽しみながら本を探したり読んだりという空間の力で読書につながることもある。
- 図書資料のほか、石、木の実、落ち葉、地球儀など、季節・行事・学習内容に合った実物資料や生写真を展示すると子供の学ぼうとする力や興味関心を引き出すことができる。
- 多様な情報メディアの中でも、新聞の配備を進めるべきと考える。新聞を活用することにより、「読む」「書く」だけでなく「考える」ことや「自分の意見を話す」ことにつながる。
- いつでも誰もが使えるよう文房具・情報カード・思考スキルなどを子供の目に見えるように配備しておくことも、探究学習をサポートする環境づくりとなる。
- 教材と子供がつながりやすい環境である学校図書館、本・新聞・雑誌とICTを活用できる学校図書館の役割は大きい。居場所としても多様な子供達が集い、常に必要とされている。

3 司書・司書教諭・学校司書等の在り方

- 児童生徒が常に利用できるような学校図書館の環境を実現するために、専門的な人的配置と安定した財政的支援が不可欠である。
- 司書、学校司書等の養成カリキュラムを融合し、コアになる部分、各職種によっての特殊な部分に分かれるような効率的なカリキュラムにすると、人材の効率的な配置もできるようになるのではないかな。
- 児童生徒の読書力には大きな違いがあり、発達段階によっても異なるため、一人一人に合った指導に必要な研究成果やその根拠、実践事例などを盛り込んだ研修体制が必須である。
- 司書教諭や学校司書の研修もレベルや内容、回数等、自治体により格差が大きい。学校司書の研修として資料の整備に関することばかりでは、授業に役立つ学校図書館を支えていく資質・能力は育たない。
- 学校司書はその専門性を活かし授業デザインを協働することができる。そのために、校内でのコミュニケーションを密にすること、職員会議や分掌の会議の情報を共有できる環境があること、校内研究に参加できることが望ましいと考える。
- 全ての教科等、教育活動でチーム学校となって取り組むことで、生徒一人一人の力となり身についていく。その舵取りをするのが司書教諭である。学校図書館に関する研修会や研究授業を率先して進めていくことが確かな道であった。
- 司書教諭が発令されながらも、授業時間の負担を軽減されない実態があり、このことが司書教諭の役割を十分に果たせない要因になっていると思われる。司書教諭がその役割を果たせるために授業軽減が必要である。

その他

- 読書による楽しみを与えられるかが重要であり、幼い頃からの読書体験がその後の読書活動に大きく影響すると思われる。
- 大人が読書を楽しんでいるか、その姿を子供たちに見せることができているかは非常に重要である。大人に読書の楽しさを伝えていくために、実用的な講座を大人にも取り組むことが有効なのではないか。その取組として、移動図書館の活用や地域内の書店等や人材との連携がより一層重要である。
- ポーランドでは、「国家読書開発プログラム2.0」があり、国全体で読書に力を入れている。このように、大きな規模で読書の重要性を訴えるキャンペーンのようなものがあるのも良いのではないか。
- 学校において担任がよく読書をしているクラスは、多くの生徒が本を読む傾向が見られる。大人が本を楽しむ姿は大切であると実感している。

以上